

■ フォトエッセイ ■

日本に暮らす バン格拉デシユ人が集う場所

写真・文：安藤裕二
Yuji Ando

写真：安達淳哉
Junya Adachi



ベンガル新年を祝うボイシャキメラの会場である池袋西口公園の上空図

●年に一度開かれるバン格拉デシユのお祭、ボイシャキメラ

二〇一四年四月二〇日、池袋西口公園に真っ赤な衣装をまとった多くの人が集まった。正面に設けられたステージでは赤い衣装で着飾った女性が「新年おめでとう！」とベンガル語で繰り返し、歌い、踊り、会場を盛り上げている。このお祭のためバン格拉デシユからやってきた歌手である。ステージから周りに目を移すと、会場を囲うように、カレーやサモサ、チャ、はたまた衣服を売る店、さらには海外送金サービスのテントまでが所狭しと並ぶ。これは、ベンガル新年を祝う「ボイシャキメラ」と呼ばれるお祭だ。「カレーフエスティバル&バン格拉デシユボイシャキメラ」と称されたこのお祭は、年に一度、在日バン格拉デシユ人が赤の衣装で目一杯のオシャレをして新年の訪れを祝う。このお祭の名前からではそのことは全く想像できないが、バン格拉デシユ人にとっては大切な日なのである。

●バン格拉デシユ人で溢れかえる池袋西口公園

主催者発表によると、今年で一五回目を迎えたこのお祭には来場者が初めて二万人を超え、うち半分はバン格拉デシユ人だと推計する。その数字を信じて、一万人はバン格拉デシユ人ということになり、池袋西口公園という限られたスペースに人口密度の高いバン格拉デシユが再現



浜松市で英会話学校を運営する若きビジネスマンのウーシャさん

されているのではないかと息を飲む。実際に足を運んでみると、確かに南アジア系の人でごった返し、日本にいるのにも関わらず日本人である自分が浮いてしまうほどだ。

では、果たして日本にバングラデシユ人ほどのくらい暮らしているのだろうか。いくつかのデータから少しずつ読み解いていくことにしよう。総務省統計局の国籍別在留外国人統計によると、九一一人(二〇一三年一月)で、主催者の数字に信憑性がないことが即座に判明してしまった。それでは面白くないので、入国外国人統計を見ると、二〇一四年四月だけで二〇二六人が入国(うち新規入国者は六二六人)しており、全国のバングラデシユ人が四月二〇日に池袋西口公園に一堂に集えば主催者の推計は正しいとも言えるが、もはやこの数字を追うのは意味がない。

●日本でも暮らすバングラデシユ人

実際に在日バングラデシユ人は日本を何をしていられるだろうか。私の周りにはバングラデシユ人は、「インドカレー」と名のつくレストランから英会話や、ベンガル語の先生、ITエンジニア、留学生、大学講師、研究者、中古車輸出業を営むなど様々だ。ここで何人かのバングラデシユ人の人生に寄り添ってみることにしたい。

一人目は、都内で「インド・バングラデシユ料理」と称したレストランを営むアラムさんだ。私の親しい友人でもあり、カレーを食べたくならないいつも彼のお店にお世話になる。素敵な笑顔と流暢な日本語



都内でカレー料理屋を営むアラムさん。インドカレーと書いているが、バングラデシユ人が営んでいる

語で迎えてくれる彼は、二〇〇〇年に日本語の留学生として来日。来日してすぐは、言葉や食べ物の違いによる苦労に加え、外国人と分かっただけで一日に三回も警察に呼び止められるなど、今では嘘のようだが苦労の連続だった、と話す。一年半日本語を学んだ後に、日本に住む叔父が営むカレー屋で約三年働いた。その後、カレー屋以外のこともやりたいと思いつき宝石ビジネスを始めたが、二〇一一年の地震を機に、食べ物の重要性を再認識し、現在のカレー屋をオープンさせた。今ではすっかり日本に慣れた彼にもたくさんストーリーがある。

二人目は、浜松在住で英会話学校を営むウーシャさんだ。幼い頃から広島のことを聞いて育った彼は、二六歳のときに日本にやってきて、自動車関連の会社で勤務した。その当時は給料が良かった半面、日本語の壁、バングラデシユとの食べ物の違いで、三年間は相当な苦労を経験したと話す。しかし彼の生まれついたポジティブな性格からか、多くの友達を作りネットワークを築げていった。「現地人と仲良くしたいなら現地に帰ればよい」と厳しい言葉を放つ背景には、数え切れないほどの努力をしたのだろう。そんな彼も日本に暮らして一八年になる。人が好



見渡す限りベンガル人で埋め尽くされる。ここに日本人がいたら浮いてしまうであろう



2013年のボイシャキメラのステージ。ステージ上にはバングラデシユから来日した歌手の姿が見える。ステージ左端には、緑に赤の国旗が飾られている

きで人とつながるために英語をやるようになった、と満面の笑みで話してくれる彼は、現在浜松で英会話学校を営み、商工会議所の青年部に属する地元でも有名なビジネスパーソンである。

最後は、ベンガル語の教師をされているアザド先生だ。一九七五年から青年海外協力隊の派遣前訓練でベンガル語を教え、日本とベングラデシユをつなぐ架け橋として計り知れない貢献をされている方である。ベングラデシユとベンガル語についてとにかく分かりやすく教えてくださり、知的で優しさに溢れる方だ。実際に私もアザド先生の下でベンガル語を学んだ教え子の一人であり、私にとって父親のような存在でもある。これまで一〇〇人以上の青年海外協力隊がベングラデシユに派遣されてきたが、多くの隊員がアザド先生と一緒にベンガル語の指導をされている奥様のスルタナ先生に教わってきた。一度ベングラデシユと関わった者がベングラデシユという国に愛着を持つのは、アザド先生とスルタナ先生とのご縁のお陰だという方も多いと思う。

今、紹介した方々は、日本にたくさん暮らすベングラデシユ人のほんの一部に過ぎないが、母国を離れて日本に来るまでのそれぞれのストーリーがあり、今日本に暮らしている。もっと紹介したい人はたくさんいるのだが、お話好きのベングラデシユ人は話し出すと止まらないので、一度皆さんの周りにいるベングラデシユ人に聞いてみると面白いだろう。

● **ベングラデシユ人にとってみんなが集う特別な場所、池袋西口公園**

話を戻すと、そんな一人一人のベングラデシユ人が故郷や仲間を思い集まる場所が、冒頭に紹介した池袋西口公園である。この場所にはベングラデシユと豊島区の文化交流の象徴として、一九五八年二月二一日の言語運動で犠牲者となった学生

を弔うための「シヨヒド・ミナル」という慰霊碑のレプリカが二〇〇五年に建設された。一九七一年のベングラデシユ独立のきっかけとなったこの二月二一日のことを、ベングラデシユでは「エクスシユ・フェブラリ」（ベンガル語で二月二一日の意）と呼び、一九九九年にユネスコにより二月二一日が「国際母語の日」と制定された由来にもなった。

このシヨヒド・ミナルがあるダツカ大学には毎年多くの人々が花を手に、祈りを捧げる。日本でも二月二一日の早朝に池袋西口公園に大使をはじめ、在日ベングラデシユ人が花を手に集い、「エクスシユ・フェブラリ」を忘れぬための歌を歌う。ベングラデシユ人にとっては特別な意味を持つシヨヒド・ミナルが池袋西口公園にあることを知らない在日ベングラデシユ人はいないだろう。

この「エクスシユ・フェブラリ」の二カ月後には、冒頭で紹介した新年を祝うお祭が池袋西口公園で開催される。そう、この場所は、在日ベングラデシユ人が故郷を想い、歴史や言葉を尊び、年に一度笑顔で集える場所なのである。僅かながらもベングラデシユと関わりを持つ身である自分にとっても、いつしかこの場所が特別な場所になっている。それぞれの想いを胸に日本に暮らすベングラデシユの人々を思うと、なんだかボーイシャキ・メラの主催者の数字を信じたくなる、そんな場所である。



ベンガル新年の習慣である赤いサリーを着て衣服を見定める女性たち。ベングラデシユの女性はオシャレだ



2月21日早朝に池袋西口公園の池袋芸術劇場前に建つ「ショヒド・ミナル」で献花をする Bangladesh の人々



ダッカ大学にあるショヒド・ミナル。5本の塔は言語運動で亡くなった5名の学生を意味する



ショヒド・ミナルの碑に献花された花。政党名が書かれたプレート付の花束も見られる



碑の横にあるショヒド・ミナルの説明文。日本語、英語、ベンガル語の3カ国語で併記されている



アザド先生のベンガル語クラスのクラスメイトとスルタナ先生

あんどう ゆうじ/ジェットロ浜松

2008～2011年8月までアジア経済研究所研究企画部を経て、2012年9月までBangladesh研修生。

あだち じゅんや/株式会社NTTデータアイ

2006～2008年に青年海外協力隊としてBangladesh・チッタゴンに赴任。帰国後もBangladesh関連のイベントに関わる。



池袋西口公園にあるショヒド・ミナルの碑